

秋のくれかた

船越 素子

空だけでは
そのなつかしさも 空気までも
熟し始めた果物の匂いがしていた
時空が捻れていたことを
痛みが美しすぎて気づけなかった

御機嫌よう 鳩尾の痛み
果樹園のなかを 風が透過し
世界がバラ色にそまってい
ほんの数分間の黙示
裸足で駆けだせばよかった
気をとりなおし
影踏みをする
ずっと逢えなかった
あなたの影も
からだをよせてたたむ

(避難所のまえには
ちよつとした空き地があつて
気高い振る舞いをする野良猫たちが
ゆるやかなコミュニケーションをつなぐ
戸口の正面で
かれらが扉を開くまえに
叩き潰すのが
翼をもつものたちの恩寵)

いまはただじつと
息をひそめて待つ
秋がすーんと
漆黒の闇をつれてくるから